

宮古島諸島地域における外囲を有する 石組墓(ミャーカ)に関する一考察

A Study on Stone Tombs with the Outer Enclosures (Myaaka) in the Miyakojima Islands Region
KURIKI Takashi

栗木 崇

はじめに

宮古島と周辺諸島は「ミャーカ」と呼ばれる石組墓が存在する地域である。

ミャーカの語源については石垣で囲んだ内部を「ミャー」と称したことによるとされており〔稲村 1957〕、比較的大きな石材を用いて、平地上に造られる石造墓で石棺の周囲を石組みが囲う特徴を共有する⁽¹⁾。

現存するミャーカの多くが沖縄県、宮古島市の指定文化財となっており、一般的にも周知の存在となっているはずであるが、歴史的な位置づけについては不確定な部分が多い。被葬者については一応、琉球王国の支配下に入る前の人間に比定されるものもあるが、遺構の年代観については古くは14世紀、新しくは近世以降と考える見解もある〔稲村 1957・金子 1966・島袋 2006〕。

そうした中で、平成27年度から29年度にかけて行なわれた国立歴史民俗博物館の「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」と題する基幹研究で、現存するいくつかのミャーカについて測量、写真撮影を行うなどの記録調査が実施された。その詳細については報告書で述べられているが〔久貝・栗木 2021〕、これらミャーカの調査に参加し、詳細に観察する機会を得たことから本稿では、石組みの形状や石材加工の特徴を整理して若干の考察を行ってみたい。

考察対象のミャーカ

今回の考察の対象は現在の宮古島市内に存在する外囲が確認できるミャーカ6基である。ただし、宮古島市教育委員会の協力で測量のために下草等が伐採されたものは詳細に観察できたが、樹木に覆われて十分な観察ができなかったものもある。またミャーカは地上に露出しており、後世の追葬、石組みの改修、積み直しがあったことも考えられ、松原ミャーカについては金子えりか氏が発掘調査後に新しく石材をいれるなどの復元を行っており〔金子 1966〕、近年では宮古島市でミャーツ墓の復元工事がなされているなど、必ずしも当初の状態でないことは注意を要する。本稿では積み直しの有無についての十分な検討を行っていない中での現状観察での所見であることをあらかじめことわっておく。

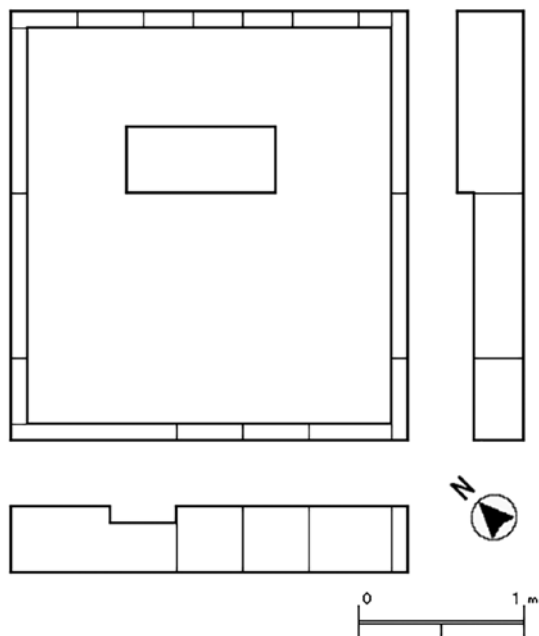


図1 松原ミヤカ模式図



図2 松原ミヤカ全景



図3 松原ミヤカ石棺

(1) 松原ミヤカ (ウイサ南)

平良字松原に所在する。外囲いは4.9m×5.1mのほぼ方形で、高さ約1m程の立石で構成される。石材は板状切石で厚みが0.3m程、最大の石材で大きさが2.3m×1.1m規模になり、立石の地上高は0.5m～1.1mと不揃いである(図1, 2)。

金子氏の発掘調査によれば外囲いの石材は安定させるために、外面の地表面との接点近くに「凸起」を有し、土中している石材の端部に切り込みを入れて珊瑚岩塊を充填していると報告されている[金子1966]が、現状では凸起を確認できない。

石棺は外囲いの中心ではなく北東側に寄って設置されており、1.7m×0.8mの長方形で、外囲いのように単純な立石ではなく、南東側壁の底部はホゾ状に加工して、南西、北東側壁と組み合わせている。蓋石は1.7m×1.2mで厚さ0.15mを測る(図3)。

(2) 久貝フサギ

平良字久貝に所在する。外囲いは外側が7.8m×8.2m、内側が6.7m×7.4mの二重になっており、樹木等の攪乱がなければ本来は内外とも平面は方形の形状を呈していたと思われる。

立石の地上高はそれぞれ北東と南東面で外1m、内1.4m前後を測り、南西面は道路に面しているためか外0.6m、内1m前後と低い。石材は高さのそろった主に板状切石の立石で構成されるが、一部に石積みもあり、方形の石材の隅を部分を欠いて石材を組み合わせる「隅欠」の技術も確認できる(図4, 5)。

金子氏の調査報告では二重の外囲いは上下に組み合わせて積まれ「テラス式二重石垣」であったと述べられている[金子1966]。しかし、一部に石材の上端が溝状に凹んでいるように見える石材も

あるが、現状ではそれを示す痕跡を確認することはできなかった(図6)。

石棺は3基あり、蓋石の大きさが北東側から2.5m × 1.5m, 2.1m × 1.3m, 1.8m × 1.25m 程をはかる(図7)。北東側の規模が大きく、これにのみ支石に板石を用いることから(図8)、他の2つが追葬と考えられ、松原ミャーカと同じように北東側に寄って設置されていたと推定されている[金子1966]。

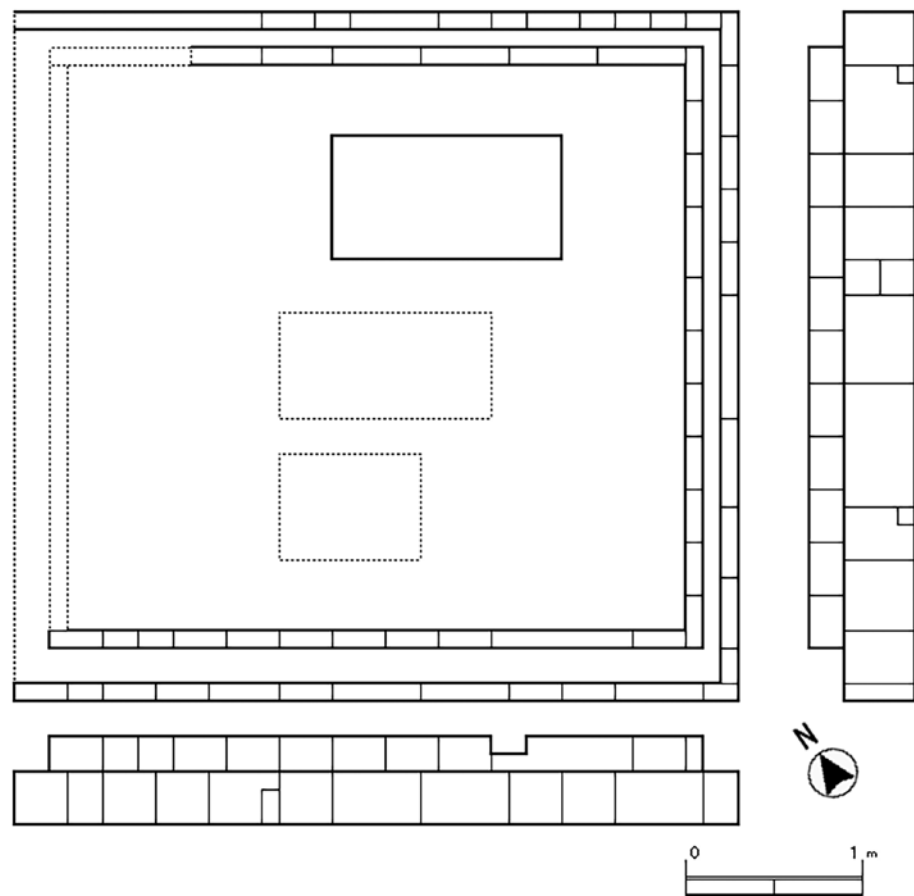


図4 久貝ブサギ模式図



図5 久貝ブサギ全景



図6 久貝ブサギ外囲い上端部



図7 久貝ブサギ石棺群



図8 久貝ブサギ北東側石棺

(3) スサビミャーカ

伊良部島に所在する。外囲いは二重となっており、周囲に葛石のような基壇があったようである。外囲いは内外とも西隅付近以外は外側に倒れたり、崩れが著しく、推定で外側が約10.8m × 7.2m、内側は約4.8m × 3mの程の長方形になると思われ、総高は2.2m程を測る（図9、11）。

外側の外囲いの石材は1m × 1m、厚さ0.3m程度の厚みのある板状石材の上にブロック状の石材を積上げている。上下の石材の組み合わせには一部に隅欠が確認でき、石材の中には石垣や間知石のように平面形が外面に対して内側が台形状に僅かにすぼまる形状を呈するものが多い（図10、12）。内側には自然礫を充填しており、のちの追葬と考えられるテーブルサンゴを蓋石とした人骨の埋葬も確認できる。

内側の外囲いの石材は充填された自然礫上に0.8m × 0.8mで厚さ0.2m程度のやや小さくて薄い板状切石の立石で構成される。倒壊や風化により不明確なものもあるが、上端が溝状に凹んでいる石材も確認でき、何らかの上屋構造物が組み合わされていたことが推量される（図13）。

石棺は1.7m × 1m程のものが1基で内囲いのほぼ中央に位置していることが確認できるが、稲村氏の報告に内囲いは三重に区画され、中央に石棺が2つあるとされていることや〔稲村1957〕、徳井氏作成の概念図では石棺が2つであることと齟齬があり〔徳井1985〕、改変を受けている可能性についての注意を要する。



図9 スサビミャーカ外囲い石積み



図10 スサビミャーカ外側外囲い上面

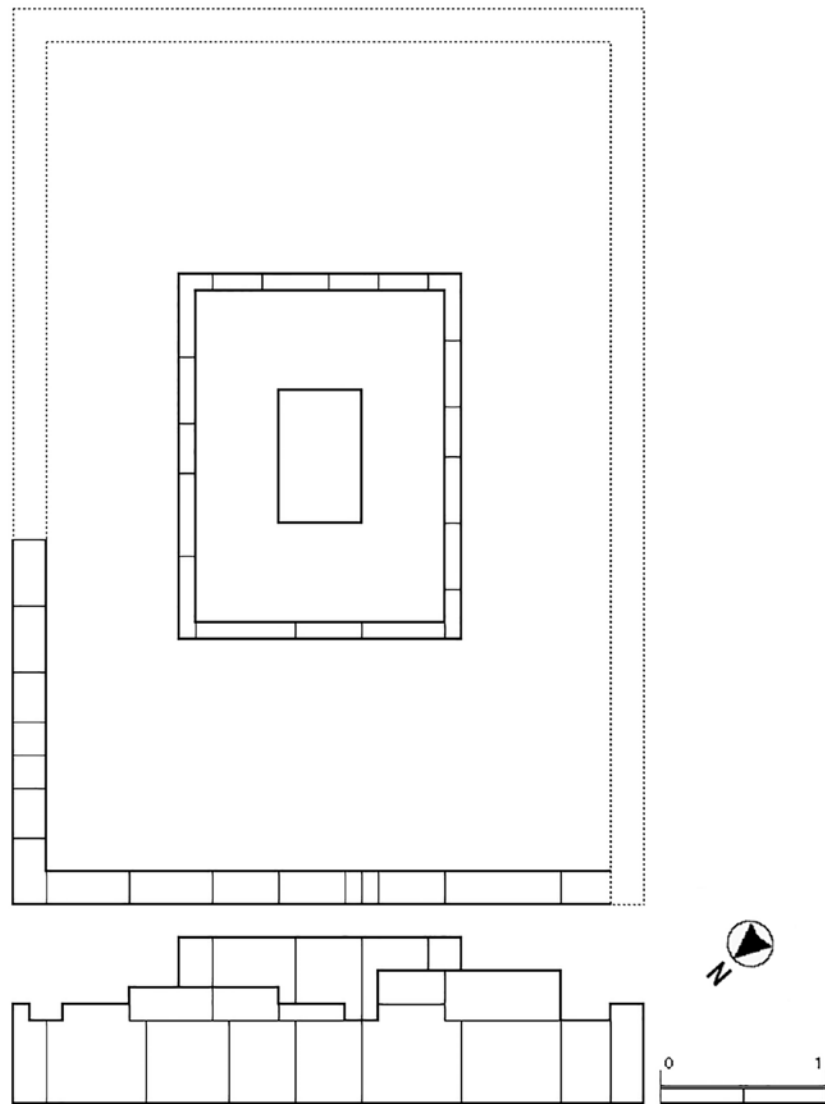


図11 スサビミャーカ模式図



図12 スサビミャーカ外側外囲い石材
(外側に対して控えが窄まる)



図13 スサビミャーカ内側外囲い

(4) スムリャミャーカ

来間島に所在する。外囲いは現状で9m×6.5m程の長方形を呈し、その周囲に自然礫による基壇があり、総高約2.5mを測る。石積みの外側の大部分が崩落しているが、1m四方弱の長方形で厚さ0.2m程度の小ぶりな切石石材を多段に積んで構成していたようで、一部に隅欠による組み合わせも確認できる。また南西面に石棺の開口部が確認できる。外囲いの内部は、石棺の天板の板石と同じ高さまで0.2m～0.4m程の自然礫を充填している(図15)。

石棺部分は、蓋石が長辺3.0m×2.3m程の不整形形状を呈し、現在確認できるミャーカの石棺蓋石としては最大規模のものである。内部は深さが1.0mほどになる板状石材で壁面を構成し、さらに同様の石材で棺内を2つに区画している。外囲いの南西面に開口部を有することから石棺というより石室と呼ぶのが適切かもしれない。



図14 スムリャミャーカ全景



図15 スムリャミャーカ石棺

(5) 川満大殿の古墓

下地字洲鎌ハシモトに所在する。外囲いは10.8m×8.5m程の長方形を呈する。長辺となる道路に面した南西側は、ブロック状の切石を三段積み上げ、高さは1.4m～1.6mと4辺の中で最も高い石積を形成する。もう一つの長辺となる北東側の石積は1段のみで高さは0.6m程と低く、短辺となる北西側と南東側の石積はいずれも2段で、両側とも0.9m程の高さを有する(図16, 17)。石材の中には平面形が外面に対して内側が台形状に僅かにすぼまる形状を呈するものが確認できる(図18)。

外囲いの内部には1基の石棺が現存するが、多くの樹木で覆われていることから、その詳細は確認できない。石棺は外囲いと似たブロック状の切石を4辺に配置し、蓋石を覆いかぶせている。ただし、稲村氏が「みャーか内部には立派な石棺があったが、大戦中に日本駐留軍によって取毀され、現在は周囲の石垣だけしか残っていない。」と述べており[稲村1957]、現在ある石棺が当初のものかどうかは注意を要する。



図16 川満大殿の古墓全景



図17 川満大殿の古墓北西側



図18 川満大殿の古墓外囲い石材
(外側に対して控えが窄まる)

(6) ミャーツ墓

宮古島市下地に所在する。外囲いは二重(2段)となっており、下壇は南西側で約10.4m、南東側が7.4mをはかる直方形で0.2~1.2m程の石材を1段~3段に、1.1m程積み上げている。石材の形状、大きさは直方体から四角錐台形、三角錐的な形状など様々である。石材は外面に対して控えの部分がすぼまる傾向にあり、外面を合わせて直線になるように積まれ、内部は自然礫で充填されている(図19)。

上壇も南西側で約9.5m、南東側が5.8mをはかる長方形を呈し、20cm~130cm程の石材を1段~4段に1.2m程積み上げている。石材の形状も下壇同様に直方体から四角錐台形、三角錐的な形状など様々である。石材は外面に対して控えの部分がすぼまる傾向で、外面を揃えて直線になるように積まれ、石材の中には一端を直角に切り落とす隅欠の技法も見てとれる。南西面のほぼ中央にはアーチ形石材があり、内部への入口となっている。外囲いの内部は自然礫で充填され、内側の面

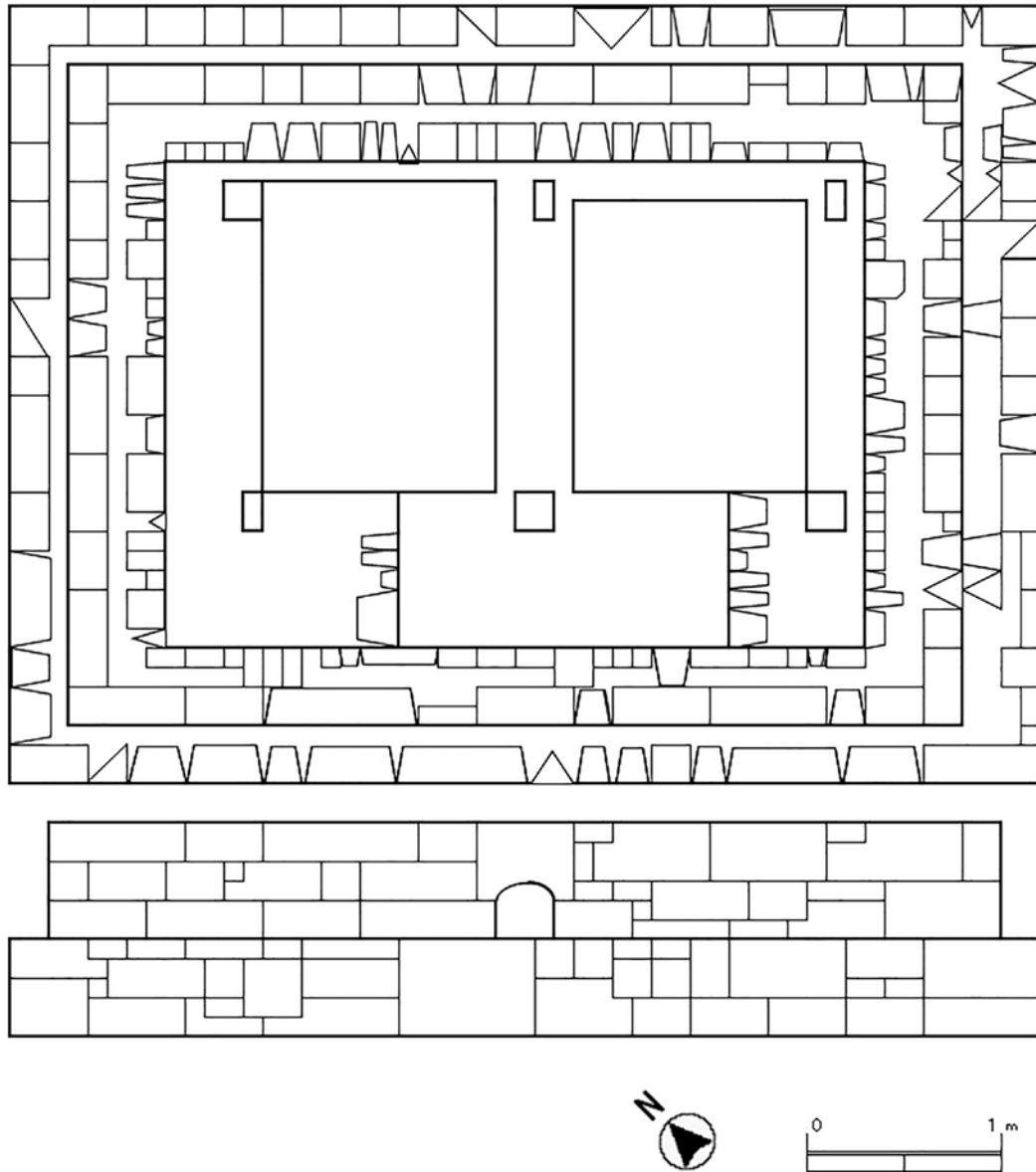


図19 ミヤーツ墓模式図

は外側より小ぶりの石材で構成されている。

内部は前庭の奥に自然礫で塞がれた開口部を有する2つの石棺（石室）が作られ、蓋石はそれぞれ2.8m × 3.4m、厚さ0.4m～0.5mほどの巨石である。石棺の周囲には上端面が明確に溝状に凹む0.4m四方前後で高さ0.8m程の柱状の石が確認できる（図21）。この凹状の加工のある石柱は仲宗根豊見親の墓の上部にある凹みの部分に桁木をのせ上に構造物があったことが想定されている石柱と類似していることからミヤーカーについても同様の構造物があった可能性が考えられる（図22）。



図20 ミヤーツ墓全景



図21 ミヤーツ墓内部(石棺と支柱)

考察

以上のミャーカについて、いくつかの要素にまとめてみた（表1）。

まず、外囲いに板状石材の立石を用いるミャーカは松原ミャーカ、久貝プサギとスサビミャーカであり、現在は外囲いが失われ、今回事例として取り上げなかったが平良字下里にある大立大殿のミャーカも石垣島市立八重山博物館所蔵の写真によって、松原ミャーカとよく似た板状立石による外囲いが確認できる。また松原と大立大殿のミャーカの外囲いは一重で高さが不揃いであるが、久貝、スサビは立石の地上高が揃い、スサビは大きくて厚い板状の石材の上にブロック状石材が積み重ねられている。この他にブロック状石材を積むものはスムリヤミャーカ、川満大殿の古墓、ミャーツ墓があげられる。これらは川満大殿の古墓を除き、外囲いの天端付近まで内部が礫で充填されている。

表1 ミャーカ観察表

	名称	位置	外囲い石材	加工特徴	外囲規模 (m)	石室
1	松原ミャーカ (ウイサ南)	平良字松原	板状切石	凹加工	4.9×5.1 地上高1.0	板状切石
2	久貝プサギ	平良字久貝	板状切石 ブロック状切石	凹加工 隅欠	外7.8×8.2 地上高1.0 内6.7×7.4 地上高1.4	板状切石 自然礫
3	スサビミャーカ	伊良部字伊良部	板状切石 ブロック状切石	凹加工 隅欠	外10.8×7.2 地上高1.2 内4.8×3.0 地上高2.2	板状切石
4	スムリヤミャーカ	下地字来間	板状切石 ブロック状切石 自然礫	隅欠	9×6.5 地上高2.5	板状切石 自然礫
5	川満大殿の古墓	下地字洲鎌ハシモト	ブロック状切石	隅欠	10.8×8.5 地上高1.6	ブロック状切石
6	ミャーツ墓	下地	板状切石 ブロック状切石 自然礫	凹加工 隅欠	外10.4×7.4 地上高1.1 内9.5×8.5 地上高2.2	ブロック状切石 自然礫

石棺は松原ミャーカ、久貝プサギ（他の2つを追葬とした場合）で北東側寄りに設置され、スサビミャーカ、スムリヤミャーカ、川満大殿の古墓、ミャーツ墓のブロック状石材を積むものは外囲いのほぼ中央に石棺が位置する。スムリヤミャーカ、ミャーツ墓の石棺については横穴式の開口部があり、石室と呼べるような構造となる。また、正面前を石組みで区画して前庭部を作り出している。

これらの形状の相違から分類するとミャーカは小規模で外囲いが板状の立石のみで構成されるもの（Ⅰ類）と外囲いが石積みで構成される大規模なミャーカ（Ⅱ類）に大別できる。

後者は石材に板状の石材を用いるもの（Ⅱ類1）とブロック状石材を多用するもの（Ⅱ類2）に分けられ、以下のように分類できる（図23）。

Ⅰ類 松原ミャーカ・大立大殿のミャーカ

Ⅱ類1 久貝プサギ・スサビミャーカ

Ⅱ類2 スムリヤミャーカ・川満大殿の古墓・ミャーツ墓

これらの形状の違うミャーカが同時代に存在したとすれば、外囲いを有し、規模が大きく、石材の加工の度合いが高いものほど被葬者の階層が高いと考えることもできる。

また、ミャーカの形状の違いを「宮古代々の巨石墓様式から横穴式の沖繩墓地に移移する中間の様式」[沖繩県教委1975]という歴史的な変遷にあてはめるなら、外囲いは板状立石から石材が厚く、ブロック状となり、石材が小形化する。また、二重、多段の石積となり、内部に礫を充填するよう

になり, 石棺が中央部に設置されるようになる。具体的には松原→久貝→スサビ→ミャーツ墓といった変遷が想定できる。

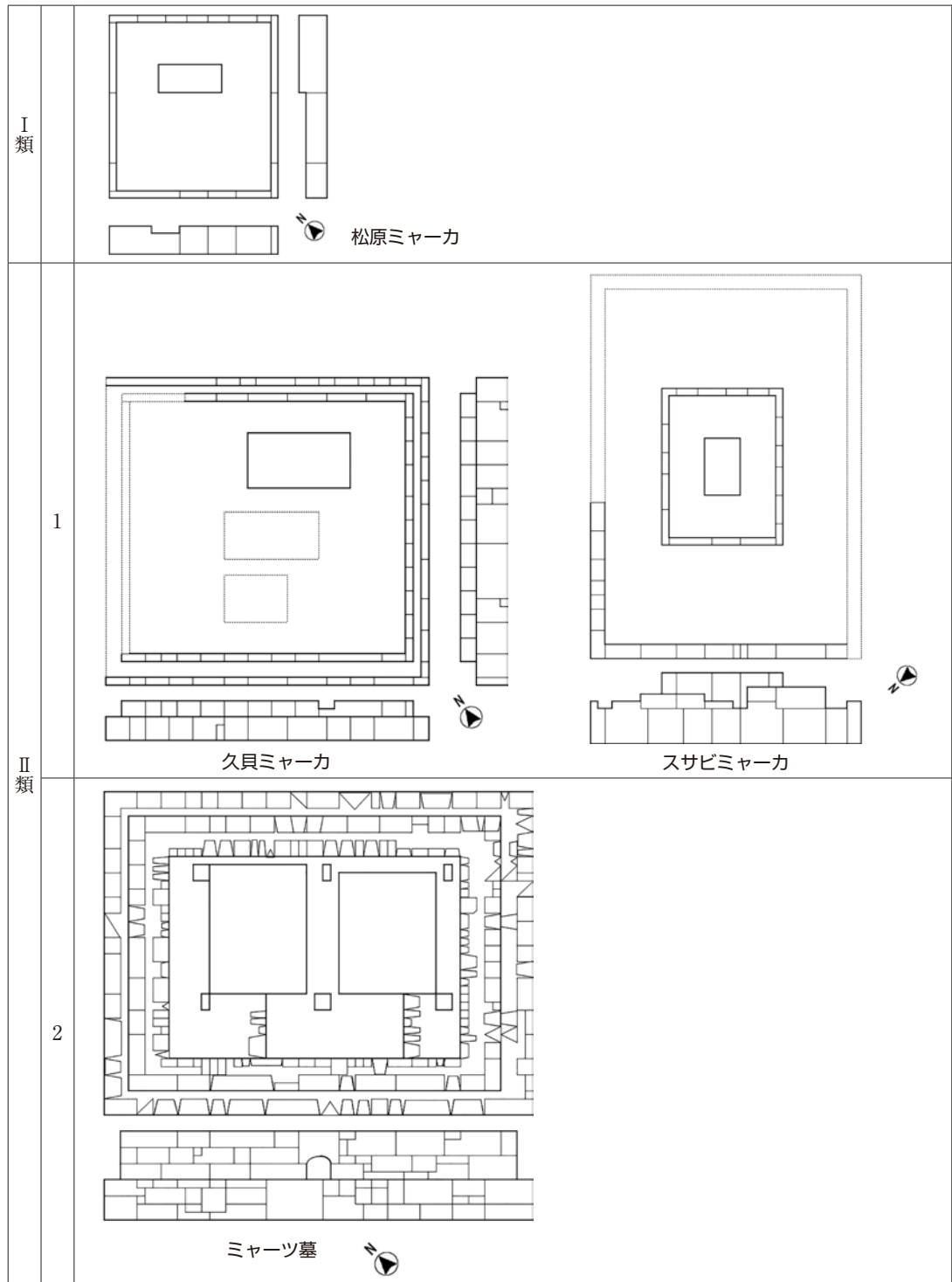


図23 ミャーカ分類図

まとめにかえて

石材加工技術の視点からいえば、ミャーカは巨石墓というだけでなく、切石を用い、細部を一部加工して組み合わせて造られていることが重要である。

はじめに述べたようにミャーカの年代観については大きくは中世並行期（英雄時代）と近世以降とに意見がわかれているが、前者だとしたら、その源流はどこにあるのかというところが問題になる。金子氏は「福建で石工技術を習得した石工」の指導の下に建設されたと考えている〔金子1993〕が、現在のところ福建やその周辺にその原型となる墓制は確認されていない〔徳井1970〕。

ミャーカが近世以降に造られたとして、これらの巨石墓の被葬者は当時の地域における有力な階層であったと想定されるが、被葬者の記録はおろか近世以降の人物とする伝承も皆無で、逆に長く塵捨場に使われ〔稲村1962〕、基本的には崇拜の対象となっていなかったというところが問題になる。

琉球石灰岩は比較的柔らかい石材であり、花崗岩や安山岩などの硬質石材ほど加工は難しくない。琉球石灰岩の切石は14世紀後半～末には沖縄本島のグスクには出現しており〔安里2004〕、当時の宮古島に採石、加工する技術が伝わっていたとしても不思議ではない。ミャーカが中世の所産だとすれば中国大陸、台湾などとの宮古島地域の独自の交流によってもたらされたものか、琉球王国を経由したものかという点も問題になる。

一方で外囲いを有する墓は少し形態が異なるが多良間島には島の開拓者として伝わる土原豊見親の墓、外囲いの石積みが切石でないが黒島にはイサンチャー墓、ヤブレ墓（ヤリメーへ）といった古い時代と考えられる墓が存在している（図24, 25, 26）。

宮古島諸島内の集落内の石積み、石橋などの他の石造構造物などを含めた八重山諸島や沖縄本島の形態や石材の加工、積み方などを観察し、検討することによって、宮古島諸島に存在するミャーカという謎の巨石墓群の歴史的な位置づけが見えてくる可能性がある。

註

(1)——当該地域においては、外囲いを有しない石造墓 回は語義どおりの外囲いを有する石造墓に限定していても小規模なミャーカなどと呼称されることがあるが、今 る。

引用・参考文献

- 安里 進 2004 「琉球王国形成の新展望」『中世の系譜—東と西、北と南の世界—』
稲村賢敷 1957 『宮古島庶民史』
稲村賢敷 1962 『宮古島旧記並史歌集解』
金子エリカ 1967 「宮古島の巨石墓について—宮古島久松の二巨石墓復元調査報告—」『沖縄文化』23
金子えりか 1993 「第三節 巨石遺跡—先島の例」『海洋文化論』比嘉政夫編
久貝弥嗣・栗木 崇 2021 「宮古島諸島地域における外囲を有する石組墓（ミャーカ）の調査」（本研究報告掲載）
島袋綾野 2003 「石垣島を中心とした墓の事例紹介—八重山における墓の変遷試案—」『南島考古』第22号
島袋綾野 2006 「宮古・八重山諸島の古墓」『考古学ジャーナル』NO. 552
徳井 賢 1970 「先島巨石墓について」『民族学研究』第35巻第2号
徳井 賢 1985 「宮古島の巨石墓「ミャーカ」」『歴史公論』第11巻第9号
徳嶺里江 2006 「考古学からみた先島諸島の墓について」『廣友会誌』第2号
福島駿介 1987 『沖縄の石造文化』
宮古島市教育委員会 2014 『宮古島市 neo 歴史文化ロード綾道（平良北コース）』

（熱海市教育委員会学芸員）

（2020年7月9日受付，2020年10月16日審査終了）